

<報告> 第18回アジア競技大会 ジャカルタ/パレンバン大会報告

著者	木越 清信
雑誌名	筑波大学体育系紀要
巻	42
ページ	67-70
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155000

第 18 回アジア競技大会 ジャカルタ / パレンバン大会報告

木越清信*

Report on the 18th Asian Games JAKARTA

KIGOSHI Kiyonobu*

はじめに

アジア競技大会（以下、アジア大会）における陸上競技の日本向けテレビ放送の解説者として、インドネシアはジャカルタ / パレンバンに 8 月の下旬から 9 月の中旬にかけて、10 日間ほど滞在した。猛暑の続く日本からインドネシアに到着すると、日中などは涼しいと感じるくらいであった。しかし、車の排気ガス等による大気汚染はひどく、到着早々に喉を傷めるという解説としては致命傷を負った。また、体育系紀要に報告するという大役を仰せつかるとは思ってもみなかったため、写真の数も少なく、決まった場所を行き来する毎日で、決まり切った情報しか持ち得ていない。しかも、我々メディア側は、選手との接触が制限されていて、選手村やウォーミングアップエリアに入ることは厳しく制限される。そのために、蚊が多いとかシャワーは水しかでないとか報道された選手村の様子などの実情を報告することができない。そこで、本稿では、アジア大会の設立経緯、大会運営、および競技場面において気になった外国人コーチに関して報告したいと考えている。



写真 1 ジャカルタの商店

アジア大会とは

公益財団法人日本オリンピック委員会のホームページ¹⁾によれば、アジア大会の開催起源は、第 2 次世界大戦後初のオリンピックであったロンドン大会時にさかのぼるようである。アジアからロンドン大会に参加したインド、フィリピン、朝鮮、中華民国（現在のチャイニーズタイペイ）、セイロン（現在のスリランカ、ビルマ（現在のミャンマー）の 6 カ国の代表によって、アジア大会を開催すること、アジア大会を開催するためにアジア競技連盟（AGF）を設立し、第一回大会をニューデリーで開催することが決められた。このときに、中心的な役割を果たしたのが、インドのソンディ国際オリンピック委員会（IOC）委員であり、ソンディ委員は、この功績が認められてアジア大会の父と呼ばれている。

その後、アジア大会は、1982 年の第 9 回大会以降、アジア・オリンピック評議会（OCA）が主催している。この OCA は、AGF を発展的に解消して衣替えしたものであり、これを機に、旧ソビエト連邦時代に連邦に所属していた中央アジアの国々（カザフスタン、キルギスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン）が加入した。現在、OCA には 43 の国が加盟している。なお、今大会（第 18 回大会）は、2009 年の OCA 総会にて、ベトナムのハノイで開催されることが決まっていたが、2014 年にベトナム政府が財政難を理由として大会の開催を辞退することとなり、その代替え都市として、ジャカルタで行われることとなった。そのため、準備期間が短く、会場の設営等を含めて大変な苦勞があったろうと推察する。なお、次回は、2020 年に中国の杭州で開催され、その次は 2026 年に名古屋で開催されることが決定している。

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

ジャカルタ/パレンバンアジア大会の大会運営について

海外でのテレビ解説業務は今回が初めてではなく、これまでに第16回アジア大会広州大会、ロンドンオリンピック、リオデジャネイロオリンピックと引き受けてきた。リオデジャネイロの治安や伝染病のリスクは、他の都市とは比較にならず、事前に外務省関係者からの盗難や強盗対策のレクチャーを受講したり、予防接種が義務付けられていたり、不安に満ちて渡航準備をした。一方、ジャカルタは、私が高校生の時にアジアジュニア陸上競技選手権大会に出場するために滞在した経験があったために、リオデジャネイロほどの不安は感じなかった。予防接種についても、日本放送協会（以下、NHK）の産業医の「予防接種の必要はない」との見解が示され、予防接種は「推奨」されただけであった。しかし、実際に渡航してみると、屋内と屋外にかかわらず蚊が多く、近くを流れる川も汚染されて悪臭を放ち、車の渋滞も経験したことのないレベルであった。特に車の渋滞は、ひどかった。車線を守るといふ文化がなく、車線に関係なく車があふれているし、そもそも信号が著しく少なく、交通ルールが守られないために、合流や交差点では慢性的に渋滞していた。また、警察車両が先導して路肩を猛スピードで走り去っていく車を非常に多く目にした。このような車両は大会関係者である可能性が高いが、要はアジア大会専用レーンなどが設定されていない（できない）ために、路肩を走るようになってしまったものと考えられる。大会専用レーンが設定されていないことに始まり、大会そのものの運営に関しては、多くの問題がみられた。施設の準備は競技開始の前日になっても終わっていないし、大会スケジュールは頻繁に変更されるし、選手や関係者の動線も決してよく考えられたものではなかった。会場内を行き来する循環バスは、大会関係者が乗るバスと、一般の方が乗るバスとに分かれていなかったため、一般の方で満員になってしまい大会関係者が乗れないこともあった。特に驚いたことは、プログラムに掲載されていない選手がスタート位置にいたことである。通常、陸上競技では、スタート位置（競技エリア）に移動するまでの間に少なくとも一回は、プログラムを元に点呼が行われることから、プログラムに掲載されていない競技者がスタート位置（競技エリア）に立つことはあり得ない。そのようなことが起こった理由について、大会側から正式に発表されていないので、真意のほどは不明であるが、あまり目にする事のない光景であった。

特に、日本の競技会では、市町村レベルの競技会



写真2 スタジアムの客席

であっても、プログラムに記載されていない競技者がスタート位置に立つことなどあり得ない。ただ、市町村レベルの競技会であってもシステムティックに運営されている国は、日本だけと言われることもある。実際に、日本の競技会になれたジュニア世代の競技者が、国際大会で混乱することは良くあることのようにある。現状、競技者には「日本だけが特別なので、ある程度海外のラフな競技運営になれるように」と指導をしている。我々の対策としては、このような指導をすることになるが、自国の競技力のことだけを考えていると、オリンピック精神に反してしまう。つまり、オリンピック憲章のなかのオリンピック精神の目的として、「人類の調和の取れた発展にスポーツを役立てること」や、オリンピックの精神がフェアプレーの精神に基づく相互理解を何よりも尊重していることを鑑みると、アジア大会などの国際的なスポーツイベントを通じて、競技運営に関する理解を促すことや、大きなイベントの成功を目標として互いが適切に役割を果たすことの尊さなどについて理解を促すこともスポーツの重要な役割であると言える。公平、公正なルール、適切な競技運営の下で、互いに気持ちよく競うことを理解し、これを通常の生活にも応用することで、お互いの平和の実現に貢献するものと考えられる。したがって、この種の国際的なイベントの運営についても、各国が協力して運営を行うべきであろう。

一方で、大会ボランティアのホスピタリティは最高であった。運営そのものに問題があったことから、ボランティアに聞いてもすぐに解決しないことも多かったが、親身になって助けてくれる姿には心を打たれた。例えば、ジャカルタの空港に降り立った時、これまでに私が経験した国際大会では、関係者専用の入国審査レーンが用意されることが多く、今大会でも事前の情報では専用レーンが用意されると聞いていた。しかし、その専用レーンが見つからず、右往左往していると、現地の民族衣装をま

とったボランティアの方が近寄ってきて、話しかけてくれた。結局、そのボランティアも専用レーンの存在を知らず、すぐには解決しなかったが、なんとか力になろうとしてくれている姿勢には感激した。これまで、多くの国に足を運んだが、先進国においてもサービス業に従事する人間にも関わらずなんの愛想もない国はたくさんあった。運営にいろいろな問題はあったものの、やはり人と人との触れ合いに温かみを感じると、ほっとするものである。

一般的にオリンピック精神として称えられる場面とは、競技者が競技している場面であることが多い。例えば、2016年のリオデジャネイロオリンピックでも、陸上競技の女子5000m予選において、転倒した二人の選手が互いに助けあってゴールするシーンがみられ、この二人の行動がオリンピック精神そのものと称えられたことは記憶に新しい。ただ、今大会を通じて、オリンピック精神は競技者のみならず、ボランティアの方を含む運営側にも宿すべき精神であることを強く感じた。2020年の東京大会の招致活動において「おもてなし」を強調した我が国であるからこそ、ボランティアのホスピタリティも高めていく必要がある。



写真3 金メダルを獲得した男子4×100mリレーチームの表彰

コーチングのボーダレス化

ナショナルチームのコーチを外国人が務めることは、そう物珍しいことではない。例えば、サッカーの日本代表監督は、外国人が務めることが多いといっても過言ではないし、Jリーグの監督においても同様であろう。また、フェンシングやボート競技においても外国人コーチが散見されるようになった。一方、陸上競技では、少なくとも現在のナショナルチームに外国人コーチはいないし、その他の単位（実業団や大学など）においてもあまり見かけない。アジアに目を向けても、外国人がコーチ（ヘッドコーチのみならず）を務めている国はほとんどなかった。しかし、今大会では、自国の出身ではない

人がコーチを務めている国が増えた印象を受けた。陸上競技はヨーロッパが中心であり、国際大会の競技会カレンダーも、ヨーロッパの事情を考慮したカレンダーになっている。当然のことながら、メダル獲得数なども、ヨーロッパ（ロシアを含む）やアメリカが圧倒的に多い。これらのことから、陸上競技のコーチングに関しても、ヨーロッパには一日の長があるというべきかもしれない。確かに、これまでも、そして現在でも、外国人コーチのもとに研修に行ったり、外国人コーチを短期で招聘したりと、そのノウハウを学ぶ機会がある。このことは、彼らに一日の長があることを認めていることになるだろう。実際に、外国人コーチを招聘することの有益な面があることは否定できない。国内の競技力を高めるためには、ボーダレス化することは必要条件であろう。そもそも、国内の競技力を高めようとするためには、コーチも競技者も国内の人間が優遇されるような制度にはならない可能性がある。言い換えると、国内の競技力を高めることと、日本人競技者に競技のチャンスを与えることとは相反する関係にあるかもしれない。ある競技会（リーグを含め）において、その競技会（リーグ）の競技力を高めようとする、外国人枠など撤廃する必要があろう。これは、コーチにおいても例外ではないことは重々承知している。コーチがコーチング能力を高めるための要因として、国籍にかかわらず優秀なコーチが採用されるべきであろう。しかし、現時点で、コーチのコーチング能力を厳密な意味で評価する指標はない。少なくとも、競技者の競技力をその指標とすることは容易ではない。なぜならば、グッドコーチングによって競技者は高い競技力を得るとの仮説を立てたところで、その例外が成立するケースが多すぎるためである。例えば、コーチのことが嫌いで、その反骨精神で競技力が上がる例も存在するかもしれない。このように考えれば、コーチング能力の評価は、その競技の競技力向上に関する洞察力を評価するしかない。そして、それを評価することが現時点では困難なのである。このように考えれば、ヨーロッパやアメリカのコーチが我々と比較して高いコーチング能力を有していると、簡単に認めるわけにはいかない。

今大会において外国人コーチが散見されたことは前述したが、具体的に気になった事例は女子跳躍種目においてである。なお、今大会、日本チームは女子跳躍種目に一人の競技者も派遣することができなかった。そして、私は、本学陸上競技部の跳躍種目担当コーチである。もし、競技者の競技力だけでコーチング能力を評価すれば、日本の女子跳躍種

目のコーチたちは、アジアでも有数のコーチング能力の低いコーチということになる。アジア大会に一人の競技者も派遣できなかったことは、純然たる事実として、真摯に受け止める必要があるし、社会によるコーチの評価は競技者の競技力によってなされる現状も、当然のこととして受け止めている。しかし、だからと言って、外国人にコーチをさせることの必要性は認めることができない。それは、我々と比較して彼らが優秀であることを示すことが、彼らが指導した競技者が、我々が指導した競技者と比較して競技力が高いことだけであるためだ。そもそも、我々だって、その洞察力は負けてはいないとの自負があるし、我々は、その洞察力を身に付けるために不断の自己研鑽²⁾に励むことができる環境にあると考えている。我々とは、研究、教育、コーチングの3役を一人でこなし、三位一体となって有機的に統合しようと試みる人間である。そのような人間であれば、その競技の競技力を高めることの本質的な答えに近づくことができると信じている。このような屁理屈を垂れながら、アジアにもひしひしと押し寄せるコーチのボーダレス化とがっぷり四つに組んで対抗してきたい。

最後に

末筆ながら、体育系紀要の紙面をお借りしてアジア大会の報告をさせていただく機会をくださった体育系紀要・研究業績集編集委員会の清水先生にお礼を申し上げます。しかし、前述のとおり、選手村等に入ることはできなかったことから報告らしい報告にならず、コーチでありながら、コーチとしてではなく放送の解説としてアジア大会に触れるという忸怩たる思いを徒然なるままに書き綴りました。拙筆をお許してください。また、テレビの解説業務は、これまでも何度か引き受けているものの、話術の向上は全くみられません。お聞き苦しい点多々あったものと推察いたします。これに関しましても、この場をお借りしてお詫び申し上げます。

文献

- 1) 公益財団法人日本オリンピック委員会ホームページ、<https://www.joc.or.jp/games/asia/history/>
- 2) 内山治樹 (2013) : コーチの本質。体育学研究。58、677-697。